

模擬患者を活用したロールプレイによる校内実習の学習効果

—— 訪問看護実習後のアンケート調査からの一考察 ——

田山 友子 吉田久美子

Key Words : 模擬患者, ロールプレイ, 看護過程, 訪問看護実習

【要旨】 模擬患者を活用したロールプレイによる校内実習が訪問看護実習に活用できた点について明らかにしていった。アンケート調査から、生活のイメージ化やマナー、コミュニケーションの大切さ、原理原則を踏まえた援助の必要性を学ぶことができ、模擬患者参加型の学習方法の効果が高いと言えた。また、ロールプレイによる校内実習を1度経験していくことで、訪問看護実習の動機につながっている。今後の課題であるコミュニケーションの実際場面での活用、看護過程を踏まえた授業構成や校内実習の検討についても明らかになった。

I. はじめに

2009年の新カリキュラム改正において、「在宅看護論」は統合分野に位置づけられた。統合分野とは、「基礎分野から専門分野IIまでの学習した内容を臨床実践で活用するため、一般病床あるいは在宅医療等の現場における臨床の実務に近い環境の中で看護を提供する方法を学ぶ内容」として位置づけている。本校の「在宅看護論」は、年齢別、疾患別、症状別という分類ではなく、生活の場で療養している全ての人々とその家族が対象であり、社会保障制度の中で社会資源を活用しながら、他職種と協働し、個別的看護の提供の必要性とすべての看護師に必要な能力であると教授している。科目構成としては、「在宅看護論I」は、概念的な内容の講義が中心であり、「在宅看護論II」は、在宅療養の場における具体的な看護に焦点を当て、講義や校内実習を行っている。「在宅看護論実習」では、地域で生活する人々の健康を守る看護と療養者とその家族への看護を実践できる基礎的能力を養う事を目標に、3年次に実質2週間1クールとして地域包括支援センター、外来部門、訪問看護ステーションなど多様な施設で実習を行っている。

近年、家族形態や社会の変化に伴って生活経験が少なくなっている学生は、対象を生活者として理解

すること、在宅で療養する対象や生活の場での看護の提供をイメージ化することは難しいと実感している¹⁾。特に4日間という限られた訪問看護実習の中では、複合的総合的な判断力が必要となるため、事前に在宅療養の場を想起した看護の実際を理解し、実習の動機づけに繋げていく必要がある。本校の「在宅看護論II」の授業では、『在宅における生活支援の方法と技術』をテーマに、学内においてロールプレイによる校内実習を実施しており、2009年からは、模擬患者（以下SP）を導入している。

学生は、在宅看護論実習前に病院実習経験や講義、演習を通して訪問場面や対象をイメージしていく。本校の学生は主として大学病院で実習するため、入院期間が短期であり大学病院という特殊性から長期臥床患者との出会いは少なく、短期間で自立していく過程を多く見てきている。そのため、訪問看護実習では、在宅で初めて経験することも多く、実際との違いに驚き戸惑いながらも現実を受け止め、学びを深めている。在宅看護のイメージ化を図りつつ、実際とのギャップを軽減し、実習への動機付けや実習展開がスムーズとなるような学習方法が大切であると考える。

先行研究では事例を通して演習することで、イメージ化の効果は報告されている²⁾³⁾。また、ロールプレイや模擬患者などのシミュレーション体験学

習の教育効果は高く⁴⁾, 特に学生同士で行うロールプレイでは, 甘えや恥ずかしさから現場のリアリティや緊張感に欠けるため, SPの教育効果が高いとの報告もある⁵⁾⁶⁾. そして, 鷹居ら⁷⁾は, 在宅看護論実習前にロールプレイを行うことで, 実習への展開につながり, 動機付けになるという結果を明らかにしている. 小林ら⁸⁾もロールプレイが実習の動機付けとしての可能性を示唆している. このようにSPやロールプレイの学習効果の研究活用が多い中, 両方を学内演習で活用して学んだ内容と, 訪問看護実習で活用できた点を明らかにした研究は見当たらない.

そこで本研究は, 本校の在宅看護論実習を終了した3年生を調査対象とし, SPを活用したロールプレイによる校内実習がどのような学習効果をもたらしたかを明らかにすることで, 今後のより効果的な教授方法のあり方を検討していくための基礎的資料としたいと考えている.

II. 校内実習の概要

「在宅看護論II」における校内実習であるロールプレイは, 『在宅における生活支援の方法と技術』をテーマに, 学習目標は, ① 在宅看護の特徴を理解し, イメージ化出来る, ② ロールプレイを見学し, 訪問看護師の関わり方やマナー, 介護者の気持ちを考えることが出来る, ③ 事例から看護問題を1つ以上展開し, 訪問看護技術を提供できるとしている.

学生には事前に校内実習の目的や当日の時間配分, 実施方法, 留意点など説明を行い, 1グループ, 5~6人の編成とした. 現職の訪問看護師2名(各クラス1名)を非常勤講師として依頼し担当教員2名とともにデモンストレーションを行った. デモンストレーションは, 訪問看護2回目の場面を設定した事例*を提示し, 療養者役・介護者役(家族役)を教員2名で担当し, 訪問看護師が看護師役となった. 学生がロールプレイの計画立案につなげやすいよう援助方法における創意工夫の必要性や在宅看護の特徴, マナー, コミュニケーション, 社会資源の活用, 他職種との連携など, ケアのポイントを強調した説明を取り入れながら進めていった. デモンストレーション終了後, 各グループに分かれ, 訪問看護3回目が必要と考えられる看護援助やその根拠・方法を話し合い, グループ毎で発表する看護援助を決定していった. また, 学生全員が役割を演じるこ

とができるよう介護者(家族)・訪問看護師・ケアマネージャーなど配役を決め, テキストや参考文献, インターネットなどを活用して計画書立案に取り組みませた. その間, 訪問看護師と教員2人が2~3グループをファシリテートし, 学生からの質問や練習をタイムリーにアドバイスしていくようにした.

約1週間後に, 学生による15分程のロールプレイの発表となった. 当日は療養者役としてSPの養成・派遣活動を行っている機関に所属している高齢男性1名の協力を得た. 学生にとってはSPの方とは初めての出会いとなる. 学生なりの工夫のもとロールプレイの発表が行われ, ロールプレイの場面はビデオに収め振り返りができるようになっている. また, 次年度の学生教育に活用している. 終了後は各グループ同士の評価発表も取り入れ, 最後には訪問看護師と教員からの助言を行った.

*ロールプレイの事例

『多発性脳梗塞後遺症(右半身不完全麻痺, 嚥下障害, 構音障害)の70歳男性. 退院後は生活意欲が低下し, 自力で動きたがらず妻に頼りきりとなり, 臥床して過ごすことが多くなった. 褥瘡を含めた全身状態の観察, 妻の介護負担の軽減を目的に訪問となる. 自発的な発語はないが, 意思疎通に支障はなく認知障害もない.』学生が講義で学んだ疾患からイメージ化しやすく, 在宅看護論実習で受け持つことが多い脳血管障害の疾患である.

III. 研究目的

本研究は, A看護専門学校(3年課程)における統合分野「在宅看護論II」の中でSPを活用したロールプレイによる校内実習の学習効果を, 訪問看護実習後のアンケート調査から以下の点を明らかにすることを目標とする.

1. SPを活用したロールプレイによる校内実習効果が訪問看護実習にどう役に立ったかを検証する.
2. 結果を踏まえ, 校内実習そのものの見直しや内容の検討を行う.

IV. 用語の定義

「模擬患者(SP)」とは看護学の模擬患者参加型学習に協力する, 患者の持つ特徴(病歴・身体所見・心理的側面)について訓練された健康人である.

V. 研究方法

1. 対象

2年次に在宅看護論校内実習を体験しその後3年次に在宅看護論実習を終えた、A看護専門学校3年課程の3年生83名

2. 調査方法および期間

調査方法は無記名で学習目標についての4段階スケール調査およびその理由について自由記載の方法を用いた。平成23年1月に校内実習を行い、在宅看護論実習を全グループ終了した平成23年11月18日にアンケート調査を行い回収した。

3. アンケート用紙の項目

学習目標について4段階スケールで選択するように、それぞれの理由についても自由に記述した。

4. 分析方法

選択肢質問については単純集計をした。また、学生が自由に表現したものについては共同研究者2名で意味・内容が変わらないように要約し、類似性・相違性に基づき分類、カテゴリーとして【】で示した。

VI. 倫理的配慮

研究対象学生に対して、「在宅看護論II」の中でSPを活用したロールプレイによる校内実習の学習効果を明らかにするために、実習後にアンケート調査を行い内容分析することを説明した。調査票は無記名とし結果は統計的に処理され個人や所属施設が

特定されることはないこと、調査で得られたデータは研究目的以外に使用することはないこと、研究への参加は自由意思に基づくものであり、協力の諾否によって成績に影響することはないことを口頭で説明し同意を得た。

本研究は、東京医科大学医学研究倫理審査に研究計画書を提出し許可を得ている。

VII. 結果

調査対象学生83名に配布し、82名（回収率99%）の回答を得た。各項目についての回答結果を表1に示した。また、学生の記述内容を項目ごとに区分をしてまとめ表2～6に示した。アンケートの回答結果から全項目70%以上の学生が役に立ったまたはできたと回答している。その中でII②のコミュニケーションの実際の訪問看護場面での活用とIV訪問看護実習時の対象の病態アセスメントへの活用の達成状況が他の項目よりも低かった。

1. 「校内実習は、訪問看護実習時に看護学生としての態度やマナー的なことに役立っていることができたか」

60%以上の学生が「役に立った」、「とても役に立った」を含むと90%以上であった。

学生の記述内容を【マナー・態度】【イメージ化】【緊張感】【リアリティ】に区分した(表2参照)。【マナー・態度】の具体的内容としては、「服装」、「家の入り方」、「玄関でのマナー」、「靴の脱ぎ」、「挨拶の仕方・話し方」、「話す時の立ち位置」であった。【イ

表1 アンケート結果

n=82 (回収率99%)

		とても	役立った できた	あまり	役立たなかった 出来なかった	無回答
I	訪問看護実習時の看護学生としての態度やマナー	21名 (26%)	55名 (67%)	6名 (7%)	0名	0名
II ①	対象の状況にあわせたコミュニケーションをとることの大切さの理解	17名 (21%)	57名 (71%)	6名 (8%)	0名	3名
II ②	模擬患者とのロールプレイを通しての経験は実際の訪問看護場面で生かされたか	6名 (8%)	54名 (68%)	18名 (23%)	1名 (1%)	4名
III ①	訪問看護実習時の原理原則をふまえての援助	12名 (15%)	69名 (84%)	1名 (1%)	0名	1名
III ②	訪問看護実習時には原理原則をふまえた援助の上に工夫する必要性の理解	18名 (22%)	60名 (74%)	3名 (4%)	0名	2名
IV	訪問看護実習時に対象の病態をアセスメント	7名 (9%)	55名 (68%)	19名 (23%)	0名	2名
V	訪問看護実習時状況にあわせたケア計画の変更・修正・実施の必要性	9名 (11%)	56名 (70%)	15名 (19%)	0名	3名
VI	人的・物的社会資源を提供する必要性	18名 (23%)	56名 (70%)	5名 (6%)	1名 (1%)	3名

表2 校内実習は訪問看護実習時に看護学生としての態度やマナー的なことに役立てることができたか

	理 由
マナー・態度	<ul style="list-style-type: none"> ・訪問看護の持ち物や服装等, 実習では適切な対応ができた. (1) ・雨の日の対応など役立った. (1) ・玄関に入り方が実際におこなうことによってわかった. (10) ・ご家族の方々に対するの関わり, 家での振舞い方を学び, 実習時に生かすことができた (3) ・実際におこなうことによって立ち位置がわかった. (1) ・靴の脱ぎ方や, 家へあがる時の向きなどの練習が出来た (6) ・挨拶のしかたなど気をつけるべきことが分かった. (3) ・訪問看護に行く前に態度やマナーの確認が出来き, 実習では戸惑わなかった. (7)
イメージ化	<ul style="list-style-type: none"> ・実際はやはり違い, 改めて気付く点があった. (1) ・実際のお宅を想像してから実習に行くことができ, 心の準備が出来た. また安心できた. (2) ・実習をやらなければ, 分からないことだらけだった. (1) ・実際の現場をイメージしやすかった. (12) ・実際に体を使って行うことで, 実習では自然と振舞えた. (2) ・他人の家に入ることがあまりないので改めて考えられた. (3)
リアリティ	<ul style="list-style-type: none"> ・模擬患者がリアルで私たちも真剣に取り組めた ・学生同士で校内実習を行うと, 療養者になりきれないし, 援助が適当になってしまうこともあるので, 実際に年齢などもあっていて勉強になった.
緊張感	<ul style="list-style-type: none"> ・実際に了承者役の人を呼ぶことにより, 友達と練習のときとは違い真剣に取り組むことが出来た
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・訪問看護師のやり方にすべて合わせていた. (1) ・技術面に必死だったため覚えていない. (1)

【イメージ化】では、「他人の家に入る機会が少ない中で役立った」「実際のお宅を想像して実習に行くことができ, 心の準備が出来た」などであった。【リアリティ】は、「SPがリアルで私たちも真剣に取り組めた」であった。【緊張感】では「実際に療養者役の人を呼ぶことにより, 友達と練習のときとは違い真剣に取り組むことが出来た」であった。

あまり役に立たなかったと答えている学生からは、「訪問看護師のやり方にすべて合わせていた」「技術面に必死だったため覚えていない」と理由があがっている。

2. 「模擬患者とのロールプレイを通して, 対象の状況にあわせたコミュニケーションをとることの大切さが理解できたか. その経験は実際の訪問看護場面で生かされたか」

70%以上の学生が「できた」, 「とてもできた」を含むと90%以上であった。学生の記述内容を【家族を含めたコミュニケーションの大切さ】【非言語的コミュニケーションの必要性】【対象に合わせたコミュニケーションの大切さ】【イメージ化】【リアリティ】【緊張感】【その他】に区分した(表3参照)。

【家族を含めたコミュニケーションの大切さ】は、「療養者とのコミュニケーションだけでなく家族と

のコミュニケーションも在宅では大切だし, 療養者もそれぞれ反応が違う」「家族も一緒にいることが多かった」であった。【非言語的コミュニケーションの必要性】については、「普段は特に気にしないことでも, 実際に初対面の人と会うときに, 第1印象は大切だということを感じられた」「非言語的コミュニケーションの患者が多かった」であった。【対象に合わせたコミュニケーションの大切さ】については、「様々な方がいる中, その対象に合わせて会話できた」「訪問した療養者1人1人が状況も違うし, 疾患も違うのでコミュニケーションの大切さが分かった」「予想以外の反応があり, 色々なことを想定しなければならないことがわかった」であった。次に【イメージ化】について、「在宅療養する人と家族が生活する場というところをイメージできたので, 実際の家で緊張をしすぎなかった」「利用者の発言は予想できないし, 個人個人異なるので, 模擬患者と関わってイメージしやすかった」であった。

【リアリティ】では、「状況がリアルだった」, また【緊張感】では「実際に援助する対象は知らない人であるためロールプレイの経験は緊張感や言葉遣いなど生かされた」「SPとのかかわりは療養者をもっと意識しながら練習ができ本番に生かされた」であった。

表3 模擬患者とのロールプレイを通して、対象の状況にあわせたコミュニケーションをとることの大切さが理解できたか。その経験は実際の訪問看護場面で生かされたか。

	理 由
家族を含めたコミュニケーションの大切さ。	<ul style="list-style-type: none"> ・療養者とのコミュニケーションだけでなく家族とのコミュニケーションも在宅では大切だし、療養者もそれぞれ反応が違う。 ・家族も一緒にいることが多かった。(1)
非言語的コミュニケーション	<ul style="list-style-type: none"> ・普段は気にしないことでも、実際に初対面の人と会うときに、第1印象は大切だということを感じられた。(1) ・非言語的コミュニケーションの療養者が多かった。(1)
対象に合わせたコミュニケーション	<ul style="list-style-type: none"> ・訪問した療養者1人1人の状況も違い、疾患も違うので、コミュニケーションの大切さが分かった。(2) ・予想以外の反応があり、色々なことを想定しなければならないことがわかった。(1) ・初めて会う方に適応する力が必要だと思えた。(1) ・様々な方がいる中、その対象に合わせて会話できた。(4)
イメージ化	<ul style="list-style-type: none"> ・在宅療養する人と家族が生活する場というところをイメージできたので、実際の家で緊張をしすぎなかった。(5) ・療養者や家族の発言は予想できないし、個人個人異なるので、模擬患者と関わってイメージしやすかった。(2)
リアリティ	<ul style="list-style-type: none"> ・状況がリアルだった。模擬患者とは初対面であり、実際と同じ環境だった。(1) ・模擬患者とロールプレイをすることで、療養者をもっと意識しながら、練習することで、本番に生かした。(1) ・模擬患者は本当の療養者ではないから、こっちの動きに合わせてくれた。(1) ・校内実習の模擬患者には私たちのケアがどうだったか後で感想を聞くことができたが、実際の療養者はALSの方などが多く初回でコミュニケーションをとることが難しかった。(1)
緊張感	<ul style="list-style-type: none"> ・実際に援助する対象は知らない人であるためロールプレイの経験は緊張感や言葉遣いなど生かされた。(1) ・模擬患者とのかかわりは療養者をもっと意識しながら練習ができ本番に生かした。(2)
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・実際にコミュニケーションをとることの難しさもよく分かり、その方法についてよく考えることができた。(1) ・コミュニケーションをとることが少なかった。手があまりだせなかった。(2) ・やはり実際の療養者とは違った。訪問した先の療養者と模擬患者の設定が違いすぎた。(2) ・模擬患者に思い通りの返答して頂けない場面があり、その時々でのコミュニケーションの難しさを実感したが、特に訪問看護の場面という訳ではなく患者と関わる全ての場面で役に立った。(1)

次に対象に合わせたコミュニケーションを実際の看護場面で生かされたかの質問については、68%が「できた」、「とてもできた」を含むと76%であった。必要性は理解していても、実際の看護場面で生かされたかどうかは別で、23%が「あまりできなかった」、「できなかった」を含めると24%であった。その理由として「校内実習のSPには私たちのケアがどうだったか後で感想を聞くことができたが、実際の療養者はALSの方などが多く初回でコミュニケーションをとることが難しかった」「やはり実際の患者とは違った。訪問した先の療養者とSPの設定が違いすぎた」としている。また、「できた」としている学生の中にも「実際にコミュニケーションをとることの難しさもよく分かり、その方法についてよく考えることができた」とコミュニケーション技術の難しさを感じている学生がいた。

3. 「校内実習したことで訪問看護実習時には原理原則をふまえて援助することができたか。また、その上で工夫する必要性は理解できたか」

「できた」、「かなりできた」を含むと99%の学生が原理原則をふまえて援助することができた。また、援助するときに工夫する必要性については96%の学生が理解できたと答えている。学生の記述内容を【物の工夫】【ケアの工夫】【イメージ化】【その他】に区分した(表4参照)。

【物の工夫】としては物品の工夫、家にあるものを活用、コストを考慮する視点、アイデアやその人に合わせて活用することなどがあげられている。また、【ケアの工夫】としては、個別性、時間の配慮、家庭のやり方、臨機応変、生活スタイルに合わせる、マンパワーに合わせて行うなどがあげられている。

表4 校内実習したことで訪問看護実習時には原理原則をふまえて援助することができたか。また、その上で工夫する必要性は理解できたか。

	理 由
物の工夫	<ul style="list-style-type: none"> ・家族が様々な工夫をして、体力的・経済的に介護負担の軽減をしていた。(2) ・在宅は物品に限られ、コストも抑えなくてはならないことを実際の現場で感じた。そのため、簡単に入手できるもの(オムツの使用テクニックとかS字ハンガー等)で代用していた。(5) ・療養者や家族の方の生活の場に入っていくので、その際の関わり方や物品の工夫などについて理解できた。(9) ・その方に合わせた方法ですることの大切さを実感できた。(2)
ケアの工夫	<ul style="list-style-type: none"> ・個性に合わせたケアが求められることを実感した。(6) ・認知症の利用者の方もいて様々な人と関わる中で、実際に工夫をする場面をみて理解できた。(2) ・限られた物品と時間の中でケアを行うため、工夫や効率の良さが必要であることがわかった。(2) ・家によって備わっているものが違うので、工夫していくことが大事だと思った。(2) ・何事も学習したまま100%行うことはなく、原理原則の上に個性が必要。(1) ・訪問先によってやり方が違うから生活スタイルに合わせる必要がある。(2)
イメージ化	<ul style="list-style-type: none"> ・役で家族側を演じることで、訪問看護師の配慮すべき点と迎える家族側の思い両方考えられた。(1) ・訪問実習で見た場面が事前に校内実習で知った工夫もあったので、少ない資源で看護が行われている事への実際が良く分かった。(1)
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・訪問・在宅というイメージに捉われやすいが、基本があつての応用だと改めて感じた。(1) ・実際に援助に関わることはなかったが、必要性は理解できた。(2)

【イメージ化】については「役で家族側を演じることで、訪問看護師の配慮すべき点と迎える家族側の思い両方考えられた」「訪問実習で見た場面が事前に校内実習で知った工夫もあったので、少ない資源で看護が行われている事への実際が良く分かった」【その他】としては、「訪問・在宅というイメージに捉われやすいが、基本があつての応用だと改めて感じた」や「実際に援助に関わることはなかったが、必要性は理解できた」であった。

4. 「校内実習で事例に基づいて援助内容を考えたことは、訪問看護実習時に対象の病態をアセスメントするために役立ったか。また、校内実習をしたことは訪問看護実習時状況にあわせたケア計画の変更・修正・実施の必要性が理解できたか」

訪問看護実習時に対象の病態のアセスメントについては、68%の学生が「役に立った」、「とても役に立った」を含むと77%であった。また、訪問看護実習時状況にあわせたケア計画の変更・修正・実施の必要性の理解については、70%の学生が「できた」、「かなりできた」を含むと81%であった。学生の記述内容を【アセスメント】【工夫】【イメージ化】【その他】に区分した(表5参照)。

【アセスメント】について「事例を一度でもやると、おさえるべきところが分かってくるので、実際の場面

でも必要な情報が取れた」「何が問題か、アセスメントの方法がわかった」等と述べている。また、【工夫】については「その人の状態、マンパワーに合わせた方法を考え、また他の療養者が行っている事をアドバイスとして活用していた」【イメージ化】では「個々の病態に合わせて様々な援助があることとグループの発表を通して知ることによって学生のアセスメントの幅が広がった」であった。しかし、反面23%以上の学生は、「役に立たなかった」としている。理由としては「時間が足りず、実際アセスメントはあまりできなかった」「流れは理解したが、校内実習と同じ対象がいなかった」と時間的な制限や機会、同じ事例の対象がいなかったことがあがっていた。

5. 「校内実習をしたことで実際に人的・物的社会資源を提供する必要性が理解できたか」

70%以上の学生が「できた」、「かなりできた」を含むと93%であった。学生の記述内容を【生活背景の考慮】【介護負担】【イメージ化】【その他】に区分した(表6参照)。

【生活背景の考慮】として、「その人その人利用する物も違うし、介護度、家族の有無も違う」「その家庭の状況に応じた工夫を実感した。臨機応変さが求められると思った」「マンパワー、経済状況は様々でいろいろな生活スタイルの人がいる」であった。【介護負担】については「家族のみのケアを行うの

表5 校内実習で事例に基づいて援助内容を考えたことは、訪問看護実習時に対象の病態をアセスメントするために役立ったか。校内実習をしたことは、訪問看護実習時状況にあわせたケア計画の変更・修正・実施の必要性が理解できたか。

	理 由
アセスメント	<ul style="list-style-type: none"> ・事例を一度でもやると、おさえるべきところが分かってくるので、実際の場面でも必要な情報が取れた。(2) ・何が問題か、アセスメントの方法がわかった。(2) ・麻痺のある方なども実際にいらしやり、その療養者自身でできること、できないこと、また何が必要かなどアセスメントしやすかった。 ・援助方法などの工夫の仕方が分かっていたので記録でアセスメントするときなど役に立った。
工夫	<ul style="list-style-type: none"> ・その人の状態、マンパワーに合わせた方法を考え、また他の療養者が行っている事をアドバイスとして活用していた。 ・目の前にいる対象にあるもので、より効果的な看護を提供する必要を実感し、現場でもその家庭の工夫や限られた資源の中で行われていたのにつながった。 ・時間が少ない中で、援助内容をすばやく考えることができた。
イメージ	<ul style="list-style-type: none"> ・個々の病態に合わせて様々な援助がある事とグループの発表を通して知ることで自分のアセスメントの幅が広がった。 ・校内で行うことでイメージできた。(2) ・家族関係を観察するイメージがついた。 ・アセスメントする機会があまりなかった。(ケアを自分で考える) ・時間が足りず、実際アセスメントはあまり出来なかった。(2)
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・療養者の状況が常に同じではない。 ・流れは理解したが、校内実習と同じ対象がいなかった。(5) ・ケアがまだまだ未熟で、訪問ナースの動きを見て学んだ。シャドー的だった。 ・急な電話がきて対応している場面があった。

表6 校内実習をしたことで実際に人的・物的社会資源を提供する必要性が理解できたか

	理 由
生活背景を踏まえる	<ul style="list-style-type: none"> ・その人その人利用する物も違うし、介護度、家族の有無も違う。(1) ・その家庭の状況に応じた工夫を実感した。臨機応変さが求められるとおもった。(1) ・社会資源についても詳しく理解することが出来たし、療養者の生活背景をふまえ、その人にどのような社会資源が必要なのか考えることができた。(2) ・マンパワー、経済状況は様々でいろいろな生活スタイルの人がいる。(1) ・利用状況や療養者に合った情報の提供の必要性を感じた。(1)
介護負担	<ul style="list-style-type: none"> ・家族のみのケアを行うのでは負担がとて大きいと感じた。(1) ・1つ1つの援助にとて体力がいる。本人家族の負担減らすためにも大切だと分かった。(1) ・援助者や家族の時間や体力、手間を考えることも必要だと思った。(1)
イメージ化	<ul style="list-style-type: none"> ・社会資源はあると便利。模擬患者に勧めていた理由がわかった。(1) ・校内実習で資源を理解し、実際の現場で見ることにより理解が深まった。(1) ・校内実習をした事で必要性を大まかに理解することが出来た。(2)
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・在宅では療養者や家族が知らない情報が多くあるので、看護師が情報提供することが大切だと感じた。(1) ・実際に実習を行った際にケアマネの大切さを深く学ぶことが出来た。(1) ・在宅で過ごす人々にアドバイスをしていくことで生活の改善につながっていると思った。(1)

では負担がとて大きいと感じた」「1つ1つの援助にとて体力がいる。本人家族の負担を減らすためにも大切だとわかった」であった。また、【その他】として「在宅では療養者や家族が知らない情報が多くあるので、看護師が情報提供することが大切だと感じた」「実際実習を行った際にケアマネの大切さ

を深く学ぶことが出来た」とあげている。

6%の「あまり出来なかった」と答えた学生は、理由については述べていなかったため理由は明らかではない。

VIII. 考 察

アンケート調査内容を① 訪問マナーとコミュニケーション ② 援助技術 ③ 看護過程の展開 ④ 人的物的社会資源について考察する。

1. 各目標の学習効果

1) 訪問マナーやコミュニケーション

93%の学生が訪問看護実習時に態度やマナー的なことに役に立ったとしている。在宅における看護の特徴は、常に療養者自身と家族を援助の対象者とし、かつ療養者の生活の場で看護展開をすることである。つまり、他人の家の中においては「客」としてのマナーが必要である。また、態度やマナーは人と人との関係を作る大前提となる。しかし、“他人の家に訪問する”ということがどういう意味なのか、学生にはイメージしにくいと考えられる。戸塚ら⁹⁾の研究のように、親のしつけによって身につけていると思いがちな「靴の脱ぎ方」「玄関へ入るときの挨拶の仕方」「相手に不快感を与えない服装や身だしなみ」などが初めての経験であったり全く教えられていない状況であったりする。また、他者の家に訪問をする機会の少ない学生にとって校内実習で経験することは、具体的なイメージ化につながり、マナーの大切さを学んだと考えられる。教員は訪問看護実習に同行するわけではないので学生からの視点に限られているが、各施設からのマナーについて「きちんとしている」と全学生が評価を受けていることから、マナーや態度については身につけていたと考える。そして、ロールプレイにSPを導入することで、学生に“療養者らしい”緊張感をもたらす。また、学生はよりリアルに訪問看護をイメージし、「実習の動機づけ」に繋がる効果があったと考える。

次にコミュニケーションについては92%の学生は対象の状況にあわせたコミュニケーションの必要性は理解していた。【家族を含めたコミュニケーションの大切さ】【非言語的コミュニケーションの必要性】【対象に合わせたコミュニケーションの大切さ】について学びを得ている。そして、SPを活用したことで、コミュニケーションにおいても【イメージ化】と【リアリティ】【緊張感】をえることができ、学習効果があったと考える。

次に対象に合わせたコミュニケーションを実際の看護場面で生かされたかの質問については、68%が「できた」、「とてもできた」を含むと76%であっ

た。しかし、23%が「あまりできなかった」、「できなかった」を含めると24%であったことから、必要性は理解していても、実際の看護場面では生かされたかどうかは別といえる。学生は「訪問看護の対象が模擬患者の設定と違いすぎた」また「ロールプレイの状況とは関係のない状況の療養者だった」「やはり実際の療養者とは違っていた」と述べており、「訪問看護の対象が模擬患者の設定とは違っていた」という意見もあり、実習施設の特徴差があり、事例設定の難しさを実感している。また、「できた」としている学生の中にも「実際にコミュニケーションをとることの難しさもよく分かり、その方法についてよく考えることができた」と、コミュニケーションの難しさを感じている学生がいた。流石ら¹⁰⁾は訪問看護師養成講習会におけるロールプレイの評価の中で、“在宅”という対象の生活の場は、本人・家族を対象とした、より複雑な人間関係の中での面接展開となることから、看護師の経験があっても、在宅における面接技術の難しさ・大切さや面接関係の難しさを体験から振り返っていると述べている。学生にとっても、今まで経験のある病院実習とは違う在宅という場において、より複雑な人間関係の中のコミュニケーションであったことを実感していたと考えられる。

校内実習では複雑な人間関係も含めて家族構成を検討し、意見の合わない兄弟の存在を事例で提示した。また、校内実習では他職種が存在としてケアマネージャー役も提示してロールプレイを行った。また、SPからは、学生の声かけに対して「家族へのねぎらいの言葉が嬉しい」「妻子に対しても、援助者役は顔を向けて声を掛けていて良かった」「家族と一緒に援助をしながらなぜそのようにするのか理由の説明をしていたのはわかりやすくよかった」等の振り返りをしていた。しかし、アンケート調査上、学生にとって校内実習だけでは複雑な人間関係や他職種とのコミュニケーションまで実感として感じ、訪問看護実習時に生かすことができていなかったと考える。

2) 援助技術

原理原則を踏まえての援助については99%の学生ができたと応えている。また、工夫についても96%の学生が出来たと応えている。校内実習ではまず「デモンストレーション」を見学し訪問看護の場面をイメージ化させ、その後同じ事例で次の訪問

時に必要な看護技術について全体で話し合い、各グループの計画立案をした。そして、計画立案する場合に必ず原理原則を踏まえた上での応用を考えられるように、担当する教員と訪問看護師で時折質問等行っていった。在宅看護論は前述したとおり、改訂カリキュラムにより統合分野となったため、より実践能力につながる看護技術が求められていると考える。在宅医療等の現場における臨床の実務に近い環境の中で看護を提供する方法を学ぶためにも、状況設定されたSPに対してロールプレイを行うことは効果があると考えられる。水戸ら¹¹⁾は臨場感ある教育方法として「状況設定」「SPの導入」「思考と統合した看護技術の評価」に注目し、有効性について取り組んでいく中で見えてきたこととして「学生は事例における患者の状況を読み取り、その患者に必要な看護技術を安全、安楽、自立、教育的指導を含めて複合的に提供することができており、おおむね有効との評価を得ることができた。」と述べている。

学生は校内実習が【イメージ化】や【緊張感】につながり、臨地実習に行く前にSPを活用してロールプレイすることは、原理原則を踏まえた上で応用力を求められる援助技術を体験し理解をするうえで効果があると考えられる。また、実習直前のガイダンスのときにも校内実習を入れているため学生は反復して経験することができたためと考える。反復することで学生の学びは深まるといえる。

3) 看護過程の展開

77%の学生が校内実習で事例に基づいた援助内容の検討が訪問看護実習時に対象の病態やアセスメントするために役に立ったとしている。また、訪問看護実習時に状況に合わせたケア計画の変更修正実施の必要性については89%の学生が理解できたとしている。

本校では校内実習前の授業においてペーパーペーパーで1度展開している。そして、校内実習では、そこを踏まえて援助内容を検討させている。つまりロールプレイのシナリオ作成には、事例に基づいてアセスメントし、問題の明確化から実際の看護計画の根拠づけを考えさせている。佐藤³⁾は、「学生は療養者の生活イメージの形成は、『年齢・性別』『疾患』『介護保険』『介護支援』の4情報から形成され、特に『疾患』からの情報が最も多い。しかし、4つの情報を統合し、療養生活を考えることが難しい」と述べているとおり、この校内実習だけでは、

疾患を踏まえることはできても、生活を踏まえた看護過程展開能力が身につくとは言いがたく、思考過程を学ぶレベルと考える。

また、学生は1日2～4件を訪問看護師とともに訪問する訪問看護実習を4日間行う。そして、8～12訪問する中で、1事例についてアセスメントし、問題の明確化から実際の看護計画の根拠づけをする。中には2回訪問することもあるが、殆どの学生は事前に情報は収集するものの療養者との出会いは1回、しかも1時間程度である。また、すでに現場で立案している訪問看護計画に沿って訪問看護師とともに援助するため、学生が主体となってアセスメントし、そして援助する機会は少ない。そのため、経験も少ない学生にとっては1回の訪問が1時間程度の中でアセスメントすることは困難と考えられる。思考過程としては学べているが、実際の場面では時間的な制約の中で行うことが影響していると考えられる。また、訪問看護師よりアセスメントのポイントなど指導は受けていても理解するまでに至らない学生もいる。実習後のまとめの中で看護過程の展開について振り返りの時間を設けているが、さらに工夫していく必要があると考える。

4) 人的物的社会資源

93%の学生は人的・物的社会資源を提供する必要性が理解できたとしている。そして、その理由として【生活背景の考慮】や【介護負担】について「社会資源についても詳しく理解することが出来たし、療養者の生活背景をふまえ、その人にどのような社会資源が必要なのか考えることができた」「家族のみのケアを行うのでは負担がとても大きいと感じた」と実感をもって理解することができている。

他職種との連携の視点は在宅では大事な学習内容と考え、ロールプレイの中でケアマネの役割を取り入れて、経済面の視点を含めて社会資源の提供をすることを課している。学生は「実際に実習を行った際にケアマネの大切さを深く学ぶことが出来た」と述べていることから、考える機会となっているとともに、実習においても必要性を学ぶことができていた。また実習では、地域包括支援センター実習も取り入れており、人的物的社会資源の提供について理解しやすかったと考える。

2. 今後の課題

在宅におけるコミュニケーションは対象者, 家族, 他職種との関係など, 人間関係も複雑となり難しさもある。その点については校内実習でも取り入れていたが, まだ実際の場面で初めて感じることもある。今後, コミュニケーション能力を強化するように事例も含めて検討していきたい。また, コミュニケーション能力については他領域との連携を取りながら強化していきたい。

生活経験が少なくなっている学生にとって, 事前に在宅療養の場を想起した校内実習は, 訪問看護実習の動機づけにはなっている。また, 校内実習によってイメージ化は出来ているが, 必要な情報をキャッチし分析していく力が弱い。その為, 対象を生活者として理解し, 在宅で療養する対象や生活の場での具体的な援助や看護過程の展開は難しい。今後必要な情報をキャッチし分析する力を高めていくための工夫や, 訪問看護実習後の振り返りの時間を工夫していく必要がある。

IX. 結 論

1. 訪問マナーやコミュニケーションにおける学習効果

SPを活用した校内実習はイメージ化やリアルティ・緊張感をもって実施するため訪問マナーやコミュニケーションにおける学習効果は高い。しかし, 在宅におけるコミュニケーションについては, 実際に訪問して, 人間関係が複雑な中での関わりであることを実感するため, コミュニケーション能力を高める必要がある。ロールプレイにおいて更に工夫する必要がある。

2. 援助技術における学習効果

在宅の現場における臨床に近い環境の中で看護を提供する方法を学ぶためにも, SPを活用してロールプレイを行うことは効果がある。

3. 看護過程の展開における学習効果

事例展開し, その後校内実習をすることで在宅のイメージ化ができた。そして実際の訪問看護をとおして, 対象をどのようにアセスメントし関わるのかという思考過程は学ぶことができていく。今後さらに効果的にするためには, 実習後のまとめの中で振り返りの時間の使い方に工夫をしていく必要がある。

4. 人的物的社会資源学習における効果

ロールプレイに社会資源の提供について取り入れることにより, 人的物的社会資源について, 生活背景や介護負担, 経済的な視点も含めて考慮しながら提供することが学べている。

X. おわりに

今回の調査から, SPを活用したロールプレイによる校内実習は, 実際の訪問看護実習のイメージ化につながり, 訪問マナーやコミュニケーション, 援助技術, 看護過程の展開, 人的物的社会資源について有効であるという示唆を得た。しかし, 在宅におけるコミュニケーションは対象者, 家族, 他職種との関係など, 人間関係も複雑となり難しさもあるということから課題も残っている。また, 看護過程展開については, 訪問看護実習の中で実際に関わる機会が少ないこともあるが, 校内実習においては必要な情報をキャッチする力を強化できるように事例については動画で提示することや, 実習後の振り返りの工夫をするなど今後反映させていきたい。

引用・参考文献

- 1) 吉田久美子. 地域看護学実習における課題レポートに関する分析. 東京医科大学看護専門学校紀要. **19**(1), 13-19, 2009.
- 2) 佐藤公子. 在宅看護事例を通じた演習が学生の在宅生活イメージ化に与える影響と教育効果の検討(第1報). 第40回日本看護学会抄録集(看護教育). **84**, 2009.
- 3) 佐藤公子. 在宅看護事例を通じた演習が学生の在宅生活イメージ化に与える影響と教育効果の検討(第2報). 第40回日本看護学会抄録集(看護教育). **85**, 2009.
- 4) 藤岡完治, 野村明美. シミュレーション・体験学習. 医学書院, 6-14, 1999.
- 5) 藤崎和彦. 模擬患者による面接技法教育. *Pharma Medica*. **13**(1), 76, 1995.
- 6) 本田芳香 (他). 模擬患者導入による学習の有効性. 東京女子医科大学看護学部紀要. **4**, 34, 2001.
- 7) 鷹居樹八子 (他). 在宅看護論実習前のロールプレイにおける看護内容評価と教育的効果. 長崎大学医療技術短期大学部紀要. **14**(1), 111-116, 2001.
- 8) 小林紀明. 訪問看護場面にロール・プレイを用いた事例展開演習の学習効果. 目白大学健康科学研究. **3**, 99-105, 2010.
- 9) 宮崎貴子. 日本の看護教育におけるSP(模擬

- 患者/標準模擬患者) 参加型学習の実態に関する文献検討. 日本赤十字武蔵野短期大学紀要, **18**, 51-56, 2005.
- 10) 流石ゆりこ (他). 訪問看護師養成講習会におけるロールプレイングの評価. 看護教育, **44**(11), 996-1001, 2003.
 - 11) 水戸優子 (他). 卒業時の到達度を踏まえた看護技術教育. 看護展望, **33**(3), 8-13, 2008.
 - 12) 小林由香 (他). 模擬患者を観察することに焦点を当てたロールプレイの効果—基礎看護学実習前の効果的な演習の一考察—. 看護教育学会, **9**, 301-302, 2008.
 - 13) 松本玄智江 (他). 模擬患者 (SP) 参加型看護技術演習における学習効果. 看護研究学会誌, 215, 2011.
 - 14) 清水裕子 (他). 看護教育における模擬患者 (SP) に関する研究の特徴. *The Journal of Japan Academy of Health Sciences*, 215-223, 2008.